

## 入試結果について

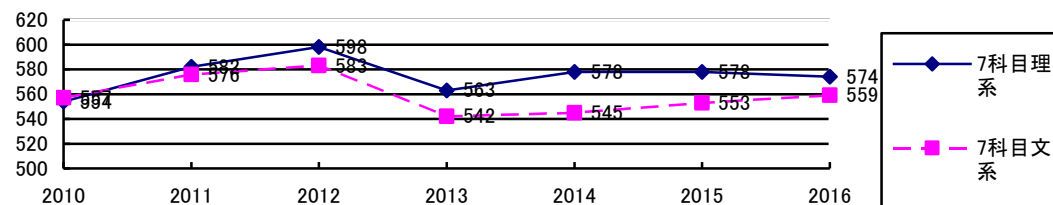
国公立大前期試験が終了して、三年生の入試は折り返し地点に来ました。私立大学は主要入試は2月に終了して後期入試、国公立大学は中期・後期入試があります。最後まで粘り強く挑戦する三年生の姿勢を期待しています。

さて、今年度の入試について現時点の結果を振り返ってみようと思います。

まずAO・推薦入試についてです。国公立大学で本校は期待した結果を下回りました。この要因は色々と考えられますが、指導開始が遅かったことは否めません。来年度は夏休み前に対策をとる予定ですので希望する人は心づもりをしておきなさい。一方、私立大学のAO・推薦入試は順調でした。特に中京大学の受験者が好結果を残したという印象です。

次にセンター試験です。下のグラフに見られる通り平均点(全国)は文高理低の傾向を示しています。これは文系人気の回復に加えて、国語・生物の平均点が上昇したこと、化学の平均点が下がったことなどが要因と考えられます。数学は数I Aの平均点は下がったのですが、数II Bで上がったために両者が相殺され影響がなかったと考えられます。本校ではほとんどの科目で平均点を下回ったものの国語、地歴・公民、生物での健闘が見られました。平均点を取ることが出来れば何とか国公立大学には合格できるレベルに入ることが出来るのですから、多くの科目でそれが実現することを願っています。

私立の一般入試についてはまだ結果が出尽くしていないので、一部の結果を報告します。まず理系の入試に関しては、前期入試は苦戦を強いられているという印象です。ただしこれは例年後期入試で緩和されてくるので、この後の健闘を期待したいと思います。一方、文系に関しては名城大学のキャンパス移転や新設学部がどう影響するかが問題です。また経済・経営学系人気が高いようです。人気のなかった大学が定員充足しているといった情報を耳にすると、「文系人気復活」という分析が説得力を持ってきます。(文責：今井雅)



センター試験 7科目型 (900点) 平均点の推移(河合塾集計)

### 1年の窓

進級前のこれからの約1か月は、毎日の学習習慣の見直しと基礎が固めをすることが大切です。

2年生になると理科、地歴・公民の学習が本格化して、今まで以上に勉強すべきことが増えるので、国数英でモレがあるとついていけなくなる可能性があります。学校で使っている問題集や参考書を、毎日決まった時間、決まったページ数を取り組むなど具体的な計画を実行することがとても大切です。学校へ登校する時と同じように朝型のリズムを崩さず、時間割を決めて学習に取り組みましょう。

諦めるのは早すぎます。入学時の新鮮な気持ちの中で立てた目標を思い出し、2年生からの新たな出発のための準備期間としましょう。この自宅学習期間、春休みを充実した日々で過ごすことが2年生をスムーズに気持ちよくスタートすることに繋がります。皆さんの頑張りに期待しています。(文責：西崎)

### 2年の窓

2月13日に実施された進研マーク模試をもって、2年生で実施される全ての模試が終了しました。結果はまだ出ていませんが、どのような印象を持ったのでしょうか？1年生時と比べて教科数も増え、時間も長くなりました。一日集中力を保たせるのに苦労している、時間配分に失敗して問題を解く時間が足りなくなってしまう、などの声が私の所にも聞こえてきます。

そこで今回考えて欲しいのは、学習の「時間」についてです。3年生を目前にして、改めて時間の使い方を意識してみましよう。「受験まで、まだ1年間あるから大丈夫」ではなく、「受験まで、もう1年間しかないから時間を計画的に使わなくては！」です。勉強も部活もクラス活動も、沢山のことが待っている1年が君たちを待っています。そんな1年を有意義に送るために、まずは自宅学習期間から、「時間」を計画的に使う練習をしてみましよう。(文責：堀内)

### 3年の窓

#### 祝 卒業式 とそれから...

まずは卒業おめでとう！！少し気が早いですがね？長そうで短い多治見高校生の生活が残り1日になってしまいましたね。どのような思いを巡らせていますか？いろんなことがあったとは思いますが、多治見高校で卒業できて良かったと思っていてくれるとうれしいです。多治見高校生らしく大学生活に向けて、有意義に準備を行ってほしいです。

また、中にはまだ進路決定がしていない生徒もいると思います。国公立の発表はこれからですからね。そして、中期、後期試験もあります。特に後期入試は欠席率が高い入試です。中には受験者が3分の1以下になる学校もあります(前期や私大が合格すれば受験しないとか3月半ばまで粘れないなどが理由)。その意味で自分の実力以上の大学に入学できるチャンスでもあります。そして3月末には国公立大学でも定員割れした大学で「追加募集」があります。河合塾などのHPで案内をしているので注意しておくといでしょう。また、私立大学でも定員を割ってしまう大学が募集をされていて粘れば願いが叶うケースも多々あります。浪人を考える人も現役でどこも合格できなかったでは来年度不安を抱えて受験ということも危惧されます。一生に一度の受験を後悔しないように頑張りましよう。

(文責：波勢)

## ○文系の窓○

## スポーツに関わる学部(仕事)

まず、みなさんはスポーツに関する学部と言えば何学部を思い浮かべますか？体育学部や健康科学部とかですかね。では、さらにもう一つ質問です。その学部では具体的に何を学び、将来はどのような職業に就くのでしょうか？一般的なイメージとしては、アスリートを目指している人や体育の教員を目指す人といった感じでしょうか。さて、今回はスポーツに関わる学部の想像とは少し違う分野を紹介します。

まずは、IT を駆使した「情報」分野です。仙台大学体育学部スポーツ情報マスメディア学科では、バレーボールの試合を専用ソフトに記録して、試合中のベンチに入力情報を届ける試みをしています。蓄積された情報からパターンを分析し、試合に生かすそうです。実際にラグビートップリーグではチーム専属のアナリストとして、試合中の分析、情報提供を行い、それを仕事にしている方もいます。次も、「情報」に関する研究ですが、先ほどとは少し異なります。新潟経営大学スポーツマネジメント学科では、Jリーグなどのサッカーの試合を盛り上げるためのイベントや会場を満席にする方法をテーマに研究しています。こちらも綿密なデータ分析を行い、サッカーJリーグのアルビレックス新潟と協力して、集客方法を考えています。入場者の平均年齢、売れ筋商品などの情報をもとに行動を分析し、リピーターになってもらおうと試行錯誤しているそうです。このように、スポーツと言っても、競技者だけを指すわけではありません。スポーツに関わる仕事は幅広くあります。スポーツ関連の仕事に興味がある人は是非一度調べてみてください。(文責：波勢)

## ○理系の窓○

前号に引き続き、家から通える近隣の医療系私立大学(難易度順)の今年の入試状況や情報などを取り上げたいと思います。(河合塾のデータを参考にしています。)

【看護師】藤田保健衛生大、愛知医科大、日本赤十字豊田大、中部大、日本福祉、岐阜医療科学大、中部学院大、中京学院大(専門学校も多数あり)

・この数年で看護師を養成する大学が増加しているが、近年の看護師人気のため、私立の上位大学への入学は一部の地方公立看護大学より難しい。また、今年度は中部大の人气が上昇しており、藤田大、愛知医科大、日赤豊田大と模試の偏差値では並んでいる。

【薬剤師】名城大、愛知学院大

・薬剤師受験資格を得ることが出来る大学は少ない。また、卒業まで6年を要し、学費の合計額は名城大が1190万円+諸費、愛知学院大が1365万円+諸費、と他の学部と比べ高くなっている。また、就職状況も変わりつつあり注意が必要である。

【臨床検査技師】藤田保健衛生大、中部大、岐阜医療科学大

・血液検査や心電図・心音図検査、検体検査など検査に特化しているため人気がある。病院をはじめとした医療機関以外にも、警察(鑑識)の道に進むこともできる。

【診療放射線技師】藤田保健衛生大、岐阜医療科学大

・放射線を用いたレントゲン撮影以外に、MRI やエコーを用いて総合的に患者の内部を調べる仕事である。放射線技師受験資格を取れる学校は少なく、専門学校でも東海圏では東海医療技術専門学校だけである。物理選択者でなくとも受験可能である。(文責：竹腰)

## ☑総合学習の扉☑

2月8日、15日の2日間にわたり、総合学習学年発表会を実施しました。全16ゼミから、代表者が発表しました。発表形式も様々で、パワーポイントを用いたり、ポスター発表の形式をとったりと工夫が見られました。

代表となった研究のいくつかを紹介します。

文系会場：「中学校の合唱教育について」「子ども虐待について」「食べて痩せる！一生太らない方法」「ロックフェスの仕組み」「心理学的にみたディズニーリゾート」など

理系会場：「空間の使い方、建築提案」「航空機という重い物体がなぜ飛ぶか」

「プログラミングの仕組み」「食品添加物の危険について」「見えない電磁汚染」など

すべてを紹介できませんが、いずれも素晴らしい発表でした。今回の発表の中で、さらに代表を2組決め、学年末考査の最終日の全校集会で発表してもらいます。特に1年生のみなさんは、自分が来年度どんな研究をしたいのかを考えながら発表を見てください。(文責：谷)



## ○Book Review○

### 『クアトロ・ラガッツィ』(若桑みどり、集英社、2003)

有名な天正の少年使節の話です。日本では信長から秀吉・家康の時代に四人の少年たちがカトリックの総本山であるローマに訪問して帰国します。その事績に関わった多くの人々の動きを、詳細な史料や研究成果の読み取りから見事に描き切った作品です。主催したイエズス会士とそれに協力したキリシタン大名、受け入れ側としてのスペイン、カトリック教会などの狙いと動きはもちろんのこと、使節達が立ち寄ったヨーロッパ各地での人々の歓迎と帰国後の禁教令の出された日本での否定的な反応など、光と影が克明に語られています。最も胸を打つのは使節四人の帰国後の動向です。逆境や失意の中で人はどう生きてらよいかについて考えさせられます。

筆者は美術史家です。美術史に培われた専門性だけではなく、ローマ・インド・マカオなど使節ゆかりの地に8年暮らし、その生活の中で約400年前の業績を生活者の視点からも取材をしています。

世界史や日本史を学習している人には馴染みの人名や地名も沢山出てきます。日本史では安土桃山から江戸初期、世界史ではルネサンス、大航海時代、宗教改革などの時代背景や人物像が互いに交流する様子を学ぶことができます。(文責：今井雅)

